

823
M8H2

張江入楚

為棠上

34

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, spanning most of the page height. The script is cursive and difficult to decipher due to fading and bleed-through.

Blank page with faint horizontal lines, suggesting ghosting of text from the reverse side.

若菜上

卅九歲

太上天皇

朱雀院御惱度

梅壺女御之服女之宮御度

御年十三回ト

同宮可有御裳着事

春宮新啓朱雀院度

年暮中納言若菜朱雀院御物語度

夕方々年十九也女はあゝんとてこれ御之れ事あり

よりて女はあゝんとてこれ御之れ事あり

朱雀院召出女之文御乳母達御物語云々事

御乳母諸才之左中弁

六条院家司

女之宮可被附屬申六条院度

太政大臣就尚侍為御子右弟門簾被至申女之宮度

女之宮可被附屬申六条院之案可被之由云々思召事

女之文御裳云々

於朱雀院栞有比度

太政大臣為御腰結事

秋好中宮秋裝束櫛髻於朱雀院給受
吉慶三個月以後朱雀院御定家受
山座主為御戒師
六条院渡朱雀院給女三宮御後見受領狀給事
又之日女三宮受詔上給受

四十策 同

女三宮可渡六条院給受
六条院四十賀沙汰之受

正月廿三日左大將小方秋若菜受
大將男二人此次見奉六条院受

依朱雀院御業不召樂人聊有御遊受

二月十余日女三宮渡六条院給受

南御殿放火立御快受

紫上女三宮御事

紫上見源氏御受敬給事

源氏君自紫上御方送消息於女三宮御方給事

女三宮住慶殿給事

源氏令見梅苑於紫上給事

源氏昼時分渡女三宮給事

朱雀院移西山御寺給受

朱雀院献御消息於女三宮給事

同通御文於紫上給事

臘月夜内侍上任二条源氏密通事

女房中納言君才和泉前司引通事

池之友盛之事

内侍上對面受詔紫上給事

明石女御自笈比御胎氣暫出六条院給事

南御殿東西為御座紫上以方一々御前而一々

源氏見紫上之智可給事

明石女御紫上女三宮未各御見奉事

十月紫上為六条院御賀於嵯峨山堂供養茶師佛受

女三宮於二条院為御賀事

於慶殿放出之之事

十二月廿日余秋好中宮為源氏御賀七大寺御誦經矣

夕旁中納言任大將了

自内裏賜六条院御賀了

夕旁大納奉行於長町有此矣

四十一歲

同

正月一日始明之女御之產御初矣

御案十四日

二月明之女御慶明之御町中對給矣

明之居之母上

三月十余日女御之產之事

七日自内御產養了

明之入道文送母君了

同送居之文了

須弥山夢之了

明之上參女御之方手見入道文箱事

紫上奉抱君宮事

源氏君見彼文箱給矣

紫上之明之上御申矣

大將君之女三宮御矣

柏木右衛門督之女三宮御矣

三月於六条院有鞠與行矣

大將先於長町有鞠矣

又於慶殿東西蹴鞠事

右衛門督自御簾隙奉見女三宮矣

右衛門督抱猫矣

食椿餅木飲酒矣

右衛門督與大將同車退出給事

右衛門督付小侍奉文於女三宮了

朱雀院

今上

母兼香后女御
明子より二葉ト云ふと云く、にまき葉と云ふ
ゆえ服よりなれ下に所位小にせりて

女一宮

ひきより

落葉宮

母一葉御息所
若葉ノ下に柏木吉志の落れ方よりぬれ
後、夕雲大将よりひきりぬりて

二小内親王

母光帝源氏

ひきより二葉院よりなり、同下には二葉院
柏木春よりきとよりぬりて、光女三宮

女四宮

ひきより

秘云朱雀院御子よりきと云ふ、今上の御子、高代、冷泉院

ひとと云

女一宮落葉宮女三宮女四宮なり

これ中にあつたことなり

高代女御は御妹と云ふなり

なりと云ふなり

年よりと云ふとハ別殿

む延元元年八月女御正三位源朝子光孝より皇女源氏にひきりぬ
後、女三子源朝子親王三人今女三宮よりきと云ふなり
光孝此源氏なり

河皇女賜源氏姓例

源朝子より女貞姫 正四位下 潔姫 正三位 全姫 尚侍 善姫 已上人

弘仁五年五月八日初賜源朝子姓也

醍醐天皇時女御源朝子親王 兼香殿光孝より皇女に

醍醐天皇之皇女源朝子親王 源朝子親王

宇多院皇女一人賜源氏姓

まうい坊と云ふことなり

朱雀のまき葉は、此の通りひきりぬ

れまき入内と

あつたことなり

年 高代事より朱雀院御代より

之名なりと云ふことなり

人乃われをよみあはれとてをよみあはれとて

石虎北御中

此御造云深氏より大屋付と伝ふと云ふ作と

御位より

朱蘆花位の事（之の源也）

年ううアーしひきこふは致仕の辰ありてあまやうのふかりの程
をふとみれとれあふとなりわ

志と遂て

とく海よりと成る

唯今之川久馬内と時

ふそれらの物を清くそけふらと記すこと
 心とて身とて
 源氏も太上太極太上天皇とてなりし

源氏も太上太皇太后天皇をうけつた

くちありとたりとん

女とてさるるを

秘
夕香々海十九

夕旁十九案(源廿九案なり)

夕方乃中納言女いあそてあかの年いた十二月のまじ

順文孝御之

女三交と夕旁一や如くんと 朱薩梵心也

何處却來此處

初
朱蔭沅北御初

その爲に任ぜられた

白雲山

をう局とふりゆう給ふりし

長身行

秘
女之文此所
謂之

何れに於て

夕暮れの中をうねる波と作らるる空

以婚交

女三

海子

秘
夕雲方の朝

その處とゆう一ひょう事とて、
なり、あてれぬ。

此乃

夕陽とくわ

あひる

舟とちりふらん

うりとも彼屋に

秘
亡系地
并

女も六条院恵くわせしにわが心と云

ちんちん

女房とてり事と朱蓮れあてて

ついでに海へあり

秘
字少

源乃事とやめく朱荳乳室へて

それ世より移ひまうり

海のうらうら時より

と又あはれなりとれなり

秘禁中ふ事おれ時のふ

うかうあられてうらうら

海のうらうらの時より

ふうきり

何となくとれなり

帝世れ宿枕とれなり

帝王れなり

相つかみなり

二十うらなり

并五或なり

私うらなり

うらなりとや宰相と大将

何ふ事なり

任泰俊女奏奏急右大将女貞信乙昌泰三年任泰俊女

秘源の女一と泰俊の女なりうらうらなり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

秘夕霧の女なり

前東院より
ありきわあけ
いそとりより朱蔭れ御親し
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

あけいそとりより
あけいそとりより

并いりて

秘
方
中
每
丸
一
錢

陸奥やー

昇
古
來
一
世

之

御公此海々々々々々

そのやうな

ほんとう

必
心
上
此
事

支
三六別股方々

それよりよりて

秘
ひきしよあかきやうに
ある

いふもあらうあるとならう

御弓せりて

秘
自然皆くくれひなり人知あゝ

めづるに女之れ宿世にうきて是よりあり

卯
ろ
て
へ
み
し
そ
り
お
へ
ひ
く
ろ
ろ
き
そ
る

文心雕龍

奇
弁
利
乃

母
之
心
を
知
る
は
子
の
心
を
知
る
に
似
て
る

私に依てとあるは、

此とせむとハ女之交誼ハ所縁とせり云々

糸海へりまに居てもあつて是を
紀人と云ふ

とふふとれりといれはまゝも女をり多らてり

千波事ハ女ナリ
此ト并ル所アリ
ト云ヒテ之ヲ

[illegible]

てんがゆとふにきよなりと云

と女に此のうとくを蒙るは所と云ふ又

吾乃知一陽之爲多也

五ノ如クヤオホハナリ

うゑのいせれう

秘源の自稱（あふれふとふとふと）

万石と千石此よりくともこのも不足なりと云ふも人々

ふりてあまのうへに
あまのうへに

再
原
我
た
れ
の
心
を
な
さ
し
て
人
を
な
さ
し
て
人

[illegible][illegible]

卷之七

後以子之

さるん

疾 何 以 爲 之 乎

之くろく

作生一公孫

その人の立身は

海防

と立ち上りて、
子方と、
比喩して、
人々を
あはれむ。

院中此より後

六条院なり

うさうもわううい

女これまの似つうき

あまた中井れあてふあうたううてわわしあ

わううううううううううううううううううう

いにあひまう

の類也

周易曰君子以類族辨物同人卦

毛詩曰窈窕淑女君子好仇註窈窕幽閑也叔善也仇匹也后

妃有関雎之德是幽貞專之善女宜為君子之好匹也

われやふいしのにわ

女之あまのうた中井と相

後とて後と朱蔭中入あてあううれ約后と中井と接て

うれ院なり

六条院あり

うううううううう

系引し

系諾し

うけひれ
ひうう
あうう
うん

うううううううう

うううううううう

朱蔭と源との事れ朱蔭

あうううううううううううううううううう

あうううううううううううううううううう

れあめのやうのえあうれし用後のか

いうううう

御免乃て用後れなり

わうううううう

并係れかといふ

御免乃てこれ初しあううううううううううう

和後乃て御免乃てあううううううううううう

あうううううう

凡うううううう

あうううううううううううううううううう

ううううううう

れいあううううう

まううううう

御うううううう

乳母れなり

とあううううううううううううううううう

あうううううう

うううううう

位乃うううう

今あううううう

あううううう

あううううううううううううううううう

ともあうううううううううううううううう

うらやまうらやま
うらやまうらやま

前より云つた通りいふうちに

[illegible]

秘
苦無_レ以_レて親のうら

ありてはこれとこれと
ありてはこれとこれと

玉是天下之親也

うゑ人しゆりあふはつゝあひりささるる女れりしあり
 色こころれふさひさちやとれた中にあふ事しとれな
 うしめるきうはささる時とをばさあやめめを

あけくさ

孟子曰女子生願為之有家父母

之心人皆有之不待父母之命媒妁之言鑽穴隙相窺踰牆相從則父母國人皆賤之

秘
因
此事ヲ引ケリ

孟子六滕文公章句之下

寄言痴少人家女慎勿將身輕許人

白氏文集井底銀瓶不及此事
止騷奔

千一

小
易を以て人を知るにあり

もくきふにありて上臈なりれりなりは不及事なり
うづれをよりうづれり

秘
親多に三男一女ありと云

秘
苑
高
三
男
一
此
即
也
云

三男唯一心々外立別法乃とありあれは吾も要するに

そせ乃ちとけさうけんあま

公此知人

今に於てもいひてゆきもいふも
 時をきかれはあゝ人々をうらや
 みるもさうぞ

あやしうゆゑに

女三交此事

是よりハ女ニ交れ所よりあてられんをよまうせとめて
なりしやゆゑといふ所も心何をもたぬと乳母はこれ

公平ゆせくそあはゆふゆふゆふゆふ

二 飛邊を以て海に投ず

秘乳母達ハノ海人ノ名

五三

あやれんや

上院乃宣示中とある乳母は、
とどろく物とす

秘
乳女と乃所子と朱産此作の物也

事に就いては

再御堂家札子小紙公傳

秘 沖病の兒よりよく仏法修行も勤行しうゑに
六条にありハ 是より女とれ所よりをなす

と仰られし朱薙乃御前

あまのこゝろのそとへあり

人かきひしあまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

家司とのそとへありきと仰りしを

系宗之介(家司)ハ女ニ交レ勅ヲ商トシテ

系宗一人奥ニハ女ニ納メ八年(治承)乃別

正三位源朝臣潔姫者 嵯峨天皇之皇女也

其人大政大臣正一位藤原朝臣良房初泰之時天皇悦其風

操起諭殊勅嫁之

一區康子内親王 延喜皇后 配九条右丞相生閑院太上天皇

嵯峨天皇 延喜御門御前之御子

右京の御前 延喜御門御前之御子

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

あまのこゝろのそとへありきと仰りしを

又平人なりけり 柳多きと人々をさへつれどもぬる所
をゆかりとあり うれはまに人々をさへつれどもぬる所

りしめありしと 秘 松語サマノト 長祿奇

ありしにとも 致仕大臣 一々なれ又なり 并月

内侍れり人の君りいれありの小方 秘 二条大后は女

ふ二条大后は女に君りいれありの母 臘月夜高の母

秘 内侍 ありしに大后は女に君りいれありの母

無難なるを お幣とて君りいれありの母

ふいかにありしと ありしに大后は女に君りいれありの母

人々をさへつれどもぬる所 ありしに大后は女に君りいれありの母

友大納言なりしと ありしに大后は女に君りいれありの母

年来朱薙院に院司大別當なりしと ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

年中納言 ありしに大后は女に君りいれありの母

人々をさへつれどもぬる所 ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

女中今なりしと 秘 せし井原中事

つらみなりしと ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

ありしに大后は女に君りいれありの母

其地乃御時

吳
龍
榜

秘威勢ありてと

私之身と威勢ありと云ふ

入道宮

うとそれなふ

ひんこ御母女御

秘女三宮此女も病をうけ姉妹のようなり

くつらむうに

あまのりつゝてはけ女と名のれ

母よりうたをいりて源氏を度くふりし
うれといひたまふとゆりくふるなりと

子

源の底くうをきうくふふ

寄心所へ

とろろね

十二月より
松本をへ

あゝれ奥年とふりねと
是るよそより此言ひあり

朱蕉地より所くらにわたりて庭よりわたりて

奉 李郭王記云天曆六年八月廿七日太上皇帝乳母加賀命婦

告送云院卿惱弥重諸人伸迂宮可宜之由去月一日叅上彙

院依御物忘立西門外案內令去廿七日八九日御恟危急卅

月晚以後頗平緩云六月從今款上皇御惱篤十三日晚上皇

回絕良久、
入夜院近告御惱靈由亥刻重泰岡十四日以

私云是兼平之御門御惱小之御病筋事

御ありし事

昌子内親王乃御うゝ海を北例とせり

朱萑北御女也又御惱恣時分也

李邵王記云天曆六年十一月廿八日昌子內親王初服袴主

上親饔餼其膳初從御厨子取并備之朱漆臺曰本以銀器

備膳同小臺二本以銀上器代備菓子親王家献烏犀御帶一

腰書法曰卷朱崔院并殿上男女宮餐其侍后十余人召弘徽

殿南廊給酒者中宮職給祿

久廣君より

秘栢梁殿朱蒼院アリ

三月三日侍朱萑院栢梁殿惜殘春各分一字應

三月三日宴干池上蓋思右之曲水也梅栢梁以擬棠亭同花
林而栽拱木皆是好閑榆桀無為風月重時節之恥致之義也
請各分一字將惜殘春云云謹序 詩畧之

御記云康保二年十月廿三日_{乙未}此日行幸院入自永寧坊就馬場殿出輿移栢殿揜延喜聖代之例每秋幸此院而栢殿燒亡之後御無此宴而去宴新搆栢殿至冬則作畢故設今日宴也李郭王記云天曆九年七月十日太上皇遷御朱雀院扈從公卿及非侍從兩馬助木給座栢殿西對

私にありし女巻にもあり

ろろろ
 れるるるるるる
 祕周禮王后之六服
 元亨三年
 の儀
 後天皇弘仁八年男女衣服用唐法し

花周禮王后六振
長恨飲傳云又命戴步搖一箇金璫明年冊為貴妃半后服用

帝、うゆいずあふさねと
 花 康子内親王のうゆいふ一葉を
 奉れ例て

大伝記云、永平二年八月廿七日、女、傳記裳となり、成、一、

李泌王允之弟永二年八月廿七日庚子內親王初着裳成一
 卷一糸左大行 親王外舅 綰沛裳腰滋野內侍理髮尚侍綰巾綰

郎叔二品そ
隱義物語云おのひとのたふふ海に腰ゆひ

清ひくはるとは乃まゐらえなりぬれうそひを忌禮は懐鈿
 の衣をとよりひふ合てうれさ紙入うひうめうせうを
 多くに帯しとてその物くうる紙もろくなくとて
 せこまの御腰張致はれ相ふ

今更之而乃大信

足るものなり

うらまゐのこゝ次
旧家殿と人みまゐれ方上人

クラシト
花人あひまゝの

藏人所納度氏：納部物以之

糸
 問云女に文部装束の付内をよめぬとせのりし花衣
 も物とおろしはるや比下れとの船衣といふや 一徳若
 花衣といふをよめ花衣はとて潤を物衣と半信りてさう
 なるもの大に忠御をさしてものなり

此
志蒙の御ゆいそとそふとそふる所可効

是ハ大倉乃削とりて流りさめらゆいとそまゝに
 凡庫船ハ億壽齒之これ申に一川とわまはさるゝといなりと
 申文よりと御流せりなり
 秋好申まを

正 沛蒙恩ふい先發とれ式わすこひくのをとて入るこ
 う沛くわけの奥 秘 東文にきくふ時のるこ

朱茂訖より
問云杖好申
文より朱茂訖の

女にまゐりてはるる育れぬく
 一物なきは女のまゐりてはるる
 育れぬくは女のまゐりてはるる
 育れぬくは女のまゐりてはるる

文惠公乃知

秘
中宮^{ミナミ}の亮^{ミヤコ}なり

院乃殿上りて
は燈亮り朱雀の殿上人より来る人

うかろそ
秘
環（刃と中）ろろ（五）事しと

孝
并姫文の御うゝあゝうのほゝうのほほ息あり

何れも、
あつた
と云ふは、
所あるに
玉れど、
持てゐる

何
秋好中
交氣ふそそり
好ひ時えあぬ
ぬうそひとも

即々此をなす事

秘
うゝあゝゝあゝゝ
標上嫁きて面白くもあゝゝ
休む

そとくしに 祢さひふけとくしにきや 早下れんを 舟中

ふ
何
あ
れ
み
字
二
川
乃
公
有
く
と
む
い
よ
れ
地
か
れ

うゝあゝと泣きつゝ
暖指遣うそれ
筆つゝあめとに

とくあふふ衣襟ひきおこしあふふ衣襟

とつてふあゝといふ相も月あり又拾遺集

大なりすまぬわが家のうゝあゝあゝのきけあゝれ

乞はさあゝとふ洞ふあうけうーあゝむうとふ

所々建いれ
身公より通
る所

あられうなりぬる

あられのきういあうとゆり

あやうり物となり秋ぬ中まゐるさうい人あれ

れりうきうんう 秋ぬのゆりううんう

さういひのやとわりうり

そつれあられい 中まれぬるれ時朱薩れぬ

そつれあられい事とあられいさういけり

大極殿あられ事さうい親されさうい

さつさうい物あられ代とけさのさうい

中まれうけさあひ女まゐる物さうい

中まに女と次あれさうい 同え物さうい

さういさうい一勅合意

さういさういゆりゆりゆり 神楽さうい

さういさうい人 中まれ人うい

集り日本紀

さういさういゆりゆりゆり

受戒之阿因梨也

元亨三年五月八日丁酉是夜太上天皇落飾入道

李邦王記云天曆六年三月十四日亥時太上天皇落飾入道

延暦寺座主權大僧都延昌為和上法性寺座主權律師鎮朝

為親教師判御髮運照阿因梨勢結已誦為唄師

案之受戒羯磨阿因梨教授阿因梨とてさうい

さういさういゆり 朱薩れゆりゆり

此市平家も女まゐるゆりゆり

かされさうい 秘女まゐるゆり

六条院もさういゆりゆり 朱薩れ出家れ後か

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

死に可成ハ合條ニテ可成

秘源の半にありと記して終ふと

けりし如くはなれり

といふことなり

饒松楸

[illegible]

沛幸此茂あふふふふ

わくはふりてあまのこころをたづね

卯
辰
巳
午
未

文以通心

源の御座とあらふに

之り終ふ御之

秘御落錯乃商

とくにえきしひ

深江落後乃歸

所
以
不
能

秘
源の中
終つ
刻
并

とれろやい

秘
お家乃公うれ事

終り

朱荅卿世家

めにとりてはしるに色なき海へく

す 朱雀ふらふらふらふら源の月殿ありあり
花も心あり
きつらりあり

朱雀乃御さるあり

世といふうらとわく約ひの後の物といふはるる母
人世のまゝとてあやせまうふらうらとてわくうら
すま後乃可といひたり并に雪ふれまはるるあり
うらうらうらうらうらうら

今れは平なれ志とて

うらうらうらうらうらうら

世といふうらとわく約ひの後の物といふはるる母

人世のまゝとてあやせまうふらうらとてわくうら
すま後乃可といひたり并に雪ふれまはるるあり
うらうらうらうらうらうら

今れは平なれ志とて
うらうらうらうらうらうら

世といふうらとわく約ひの後の物といふはるる母

人世のまゝとてあやせまうふらうらとてわくうら
すま後乃可といひたり并に雪ふれまはるるあり
うらうらうらうらうらうら

今れは平なれ志とて

うらうらうらうらうらうら

世といふうらとわく約ひの後の物といふはるる母

人世のまゝとてあやせまうふらうらとてわくうら
すま後乃可といひたり并に雪ふれまはるるあり
うらうらうらうらうらうら

今れは平なれ志とて
うらうらうらうらうらうら

世といふうらとわく約ひの後の物といふはるる母

人世のまゝとてあやせまうふらうらとてわくうら
すま後乃可といひたり并に雪ふれまはるるあり
うらうらうらうらうらうら

今れは平なれ志とて
うらうらうらうらうらうら

世といふうらとわく約ひの後の物といふはるる母

人世のまゝとてあやせまうふらうらとてわくうら
すま後乃可といひたり并に雪ふれまはるるあり
うらうらうらうらうらうら

ケテ成るおとく後乃世のぬらういひ
秘 終る人さぬらうと定ぬ
てようもせしと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

あつたれさやうれ人神とさるうさるうとやうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

あつたのぬらうとさるうと世とさるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ
忠仁公交互端
秘 終る人さぬらうと定ぬ

人さるうとさるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ
あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ
あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ
あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

日月流邁歳不我與 毛詩 日月逝矣歳不我與 論語

内親王一人 同云女家親王宮下あつて号さるや 一箇食

あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

あつた事あつた人さるうとさるうと
秘 終る人さぬらうと定ぬ

延喜御記

御精をあれは
これに精と
云れ今案
綴

私云うじ抱うて客とまうけぬをしめす

家次

字
らとそあめりか

院の御前よせんくれをらん御ら

河
漢
石
御
針

御堂家以後よりて神と用ひし

朝覲行幸時主上御前物ハ紫檀懸盤六斗有打敷木淺色也

付之可唯之又御所依御法粹致用之新と云々

出家後の思ひ寄る門御堂家後正月三日親訪幸此有

延祐御門仁和寺（行幸之時爲此笏）と撤之れ之又平

三、あしはつり又まゝあもほくしうも同く山菜と供するなり

為所法祚の時を以て礼する事あり

寛平は皇れじし乃臨ともるひよりとこふ

あられがられと

秘
考
子
地

別尚大納言

前乃若大卿玄女之此所うるをうへん

山文北山

女三礼中と源の臥状よりと朱雀の心あけ荒巻

不復心之

祖
源氏公之御子孫と云ふ也

うゝとありし前の無垢と

新
念此心
權
念此

三

秘訣正統

乃
乃
乃
乃
乃

そより其の甲と云ふは

中くうきうきうきうき

かゝるは

中水ありまふと

71

見ふ所なる

唯とよみのやとみまきふくふく

わうれいあゆまわつたつてハハ大切めでさきと

いふあとちと

秘
を
め
く
ふ
れ
た
り
と

その軟らうらわきにて

秘朱蘆子鳴り松上雲(昇)

私をどうも此處にあらんことをなす所の所中あらは

申冬より打あふて暫と何うなる

陳文公

初
海の詞

えいさめんふーぬら次 むつれ像のつとみ

あうきうふいゆふとあとしうきり

あひぬれとさうりれぬいさひ 秘 南時ハむつと

た政大臣御女右大將れ小方あれとあひきりいりき

再むつれふとまといりーさんて

いぬれかきれぬーらあらいつ

秘 放出 廂ノ名し 成院云出右半し

秘 六条院乃ぬれかきれぬらあらいつ

ひやうぬふーら 屏風 壁代 又防壁ヤロ

いーあしハあてと 秘 倭子 ひとあしニあは

秘 ぬれかきとあてとみぬれきあき

秘 ぬれかきとあてとみぬれきあき

御記云奥ニ螺鈿乃倭子とあてとありと

秘 地敷ハ座敷ニ大紋云初唐なり付とゆ 或新賢地鋪と

新賢地鋪ハ檀乃きひなり

秘 云座敷ニ縁とりあり

御記云 延喜十六年 當座南座鋪地敷二枚其上鋪幅帛備

踏取 秘 田十枚ハ源氏乃年れ敷

御記云 菌 同御記云行幸亭子院

西南東座當座才一間皆同云敷菌 服息 同御記云立時繪大

床子三脚其上立沉香之使息一脚

それ御記云 年れよりあり 螺鈿 延喜十六年御記

らてん乃御記云 二基納御法服

御記云母屋前立二尺蔭絵御厨子四基 二基納御法服

同十六年御記云 立三尺蔭絵御厨子各納法服冬夏各五具

仁和元年太政大臣賀夏冬衣裳五龍卧具屏風有敷

御衣云 秘 田十賀あふりて田十

夏冬御記云 秘 田十賀あふりて田十

りこらりれと御記云 秘 田十賀あふりて田十

寝殿装束

二階一脚南

上置史取湯汁杯有臺中階薰壺打乱筥

一脚

置厨子

下相二連一合次置唐櫛匣一双其次種臺

不^二斗^一筥有臺并蓋

二脚東置櫛匣一双其下置香壺匣西置菓子茶

しうこつ字れろと打られろこちの敷なり

ゆきつういひんあうれ敷こけのわ打乱筥と同

御しうれあいろんろんとけりうつしとややと

の一切乃物りもんのもとのあやとち定家ゆ従なり

是も本れろこちの半しあやとちと

延長二年正月廿五日御賀御記云南廂自東才四間立持双

机一脚有銀山銀水金銀花樹木

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あききうひとまけりいあゝあ

秘^二け^一いあゝあゝ色もろゝあゝあゝいあゝ

あゝあゝいあゝ

ゆ閑簾

むうろれあゝあゝあゝいあゝあゝあゝ

あゝあゝいあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

あゝあゝいあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

秘^二乃^一花と臺ふうてきとろく表本と持双花

あゝあゝいあゝあゝあゝいあゝあゝ

五

あやふし

帝正衣冠

三才圖會

秘
源の詞

くふを流すなり

秘御錄

中納言右衛門

秘
中
為
局
北
腰

人子之

秘
は御賀と才一り云ふ事也 并

上東門城より二十里外にありし所なり
物治より

飛鳥山奥山麓谷地云々

あうゝとあうゝと

あひだ

紫雲の如く月つゞきそりものつゞきとめかきつる
御子より月つゞきそりて西とていふなりし

世知そりれひき

秘
せりてハニありしか

源氏ヲ恥ナクシテ
クハミナリ
好ツナリ

御之方海之

秘
幽玄

祝義宗さうりやうり

小松りゝ末のようひはむれりや
なほりゝあもむ世とほひみ

吾自覺之乃知君爲之守也

秘
末をいふ人歟といふ事なくあつた所を年とらうたにふくむと

武部心交ふ事なり

鼻
はふれ父なり

高木桓上乃事あり
高木桓の君の祖父をいふなり

かゝつて大将の志をうつる所はまさしく如くぞ

大將此よりふそく内あゝひりけりお

毎旦て
 源氏親仕を
 のこさぬと
 ころ物より
 所始り

かたきとけりめいけんと

帝いもとれ君みめら

大將の武略の文を採る

并
式船に
文牒ありしを孫に
与ふ程の兄なり

い川をたづねてまかりあらはるる

の難役 武部はこれ源をうつてひつり（あり）まのふとつた
このふとつたふとつたふとつたふとつた

の簀物 四十枝 折檻物 四十

秘 ころの 献物 簀物 あり

ふとつたふとつたふとつたふとつた

外記 延長二年正月廿五日

御賀中勢は教慶親王以下同氣補朝臣執捧物惣七捧之數

或是并奏物盛次侍従以下執折檻物惣七捧之數 入自日華

門別立庭中一別親王以下各奏物名内膳正忠平膳申入

自月花門受捧物出同自同門

御うつてけつてけつてけつて

御土筆下八盃下八

何延喜十六年御賀御記云請中勢は親王上野大守親王太宰

帥親王給酒于時左馬門等奏羽后奉有命召环属給即退

孟飲説施舞 延長御記云宋女調和若菜奏供進宋女又

以供進餘奏給時后盛中燒置中盤

御前より 源の御前

ありんたふとつた

秘 御筆

朱薙乃乃ふとつた

御茶度御腦乃事

ふとつたふとつたふとつた

とつたふとつたふとつた

ふ人ふとつた

延長十三年尚侍賀御記云命侍后

合奏弦歌白彈和琴中勢は親王彈琵琶克明親王彈琴

不召樂人度此未之例歟

并 樂筆之惣名也

秘 管れ物

名物ともて類あり

私云宋筆は物なりといふひ 第一は管とハ弦乃物なり

又管は物なりといふひ 第二は管とハ弦乃物なり

和琴ハ物なり

教仕相国秘薙れ和琴今と云教仕は

ふとつたふとつた

固辞 余の人なりといふ

ふとつたふとつたふとつた

秘 物なりといふ

おとつたふとつたふとつた

ふとつたふとつたふとつた

秘 終嗣

和琴

和名云日本琴

万葉集云借用和琴二字也

末止古止譜序夫和琴者依為本朝之奇筚不載漢家之書籍
上始自神皇下至于人倫之今公宴之庭和遊之時無相携但
云調子云拍子暗習音曲不傳案譜云又嵯峨天皇別令此
曲傳之尚侍廣井女王之後頗中絶兼和聖主深好神琴召慈
賀善門於階下習御其曲尤大信源信同習其曲于時相坂
邊有蟬歌翁々充長此道仍遣右近少將良岑宗貞暗令傳其
手又貞觀聖主召藤原朝臣磐井木習御彼時貞保親王蒙勅
命頗作此譜也 延喜聖主極管絃之妙其中和琴尤長吏傳
賜右兵衛佐友厚敦忠習得其朝臣薨後天慶聖主勅命云
詣式部卿親王敦實伴可習兼又尤大信雅信以為彼親王家
督深傳此曲以隆大納言時仲參河守經相越前守經宗筑前
守兼俊兵庫守頭邦家雅守守範基木朝臣皆繼倫々不绝矣
已上右左未附
經尚注進公家 或說云和琴監觸六張之曲以て是を律
系は月ふと後人思ふなりと傳へる上は西の
物物れるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

鴨長明抄云

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

和琴は唐より傳へる

宣陽殿

西宮抄云納殿累代御物在宣陽殿恒例御物

納藏人綾綺殿紙御屏風納仁壽殿苑人取雜色為領 御記

延喜五年正月廿二日召保忠令吹笙曲調頗比聽因賜橘彼

笙故太政大臣昭宣公弱冠時兼和天皇為令學習取給也寬

平中以其名物而献之其後為宣陽殿笙令尋旧云賜之 同

延喜十六年四月廿二日此日返納宣陽殿累代書法此殿自

本納書法百九十七卷往年皆々著覽又於御書取境取也今
模写切訖返納本取只雖大数木無納目觀其起各或有誤謬
仍新作目錄一卷細記題名裝束及其訛謬加以置之欲後來
者見之頗有分別耳又加書法三卷足二百卷凡厥子細具在
目錄即令右近少將伊衝藏人行亦檢細之

右院來例

桐壺帝

一品乃

朱崔院中同版此作

御

一品乃

つ

ん

感

感

う

源の

さ

御記云延喜十六年三月

御賀誠樂中務卿王太宰帥親王在階下侍臣五六人又唱歌

う

及音律

及音律

あ

青柳 律催馬樂

長生樂序

拍子

長生樂序

て

ひ

物

ひ

う

ひ

法

事

一

あ

傍

御

う

秘

と

う

か

とれくちをやすうと

井 町に集めて源をいふ

私をやすうと源をいふ

細い人せうと

くちをやすうと源をいふ

わくわくわく

源のふち

うきうき

井 玉つてれ身乃う

大物の富り富り

わくわくわく

玉つてれ身乃う

うきうき

さけり

秘 さいうと

は比女三交

は比女

六條

うきうき

井 寝る

玉つてれ身乃う

神一

内り

秘 内れ

源氏院

りれ

秘 大

御車

内下れ

院中

れ

秘 下れ

さい

れ

一

あ

き

秘 弟

内

い

秘 家

權

井

秘 源

い

あ

れ

ま

は

とらゐる

秘
急とならわ

何れも此の如くあらざるべし

秘
乞
ふ
後
れ
と
う
わ
ん

そぞろあつても心つてあつてふれとてうけあり
とりも何といはれにとあつて
今暫つりとあつて

今更つらとあたふと

此海の西へとてあそびにゆきし今より十年
 もあきあそびにゆきし今より十年

三

源のちり

修之例に

所
与順
深心之海也

そとむらゝ

秘
書

あみらくしめさへうる家世中とけを流しぬれとくうを

秋の夜乃下染りつきてあふらくはあふくのそそるは
きふもくもくありあへ

源のて

命とをさへもけはかりなりきなりとにノ白れるに定め

うたせのあひなうねありといふあり

秘
け二人の笑り毎所れさうなれ笑りれ歎いてハなれと
又
定あまよのきれ笑りりていあまよと 面白き句は

私に接するも、はたし、いふ世に、
なり、なり、なり、なり、なり、なり、

とくに

秘源あり

此

空の海とありて、女と乃由と

いふ海なるなり

てあにきう

寒くは

うづまわん

はるけくで櫓は舟渡あとの事

五ノ

きより雲の中にかくる事

くせきふんもあのかたなりぬ

世のあらしとてわがあはれ

申しなめたる朱薩比御女といふ

今より暖也

世に不定にけれ事と出来ぬこと

さしそでなうほろろ

寒水初

ありてはなむあり

乞より三つぬくはれあり

うさうり

并 おとく神

ひーあらく

現軍をふさぬれん

きうれても

兵のあつてゐるに違ふ

ねのうさう

うさうぬんれんれん

あつてゐる

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

ひーやう

女さうり

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

うさうぬんれんれん

何事と人さうり

うさうぬんれんれん

うさうぬん

再になら

うさうぬんれんれん

女さうり

何事と人さうり

中勢中將軍

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

源の神さうり

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

うさうぬんれんれん

兵あつてゐる

うさうぬんれんれん

并 兵あつてゐる

兵あつてゐる

なすてうさのさあつなやまん せうと説くてあふ

この金とんちやあはれう海あり 例よりいふと人のさうんおとをえと

けりえきいひあも 多ふと人のけつうにうあひうふおとけとけり

きんさうさひきいふく せうとくやれねくう海あり

次でれ海あり 出くあくさあつうとくふとあわねん中なる

かうあてれ中うらあさ けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

けりえきいふとけり けりえきいふとけり

こよれいひきりり

あらしきこゆるん

源乃はるのねふ初しきり

こよれいひきりり
あらしきこゆるん
源乃はるのねふ初しきり
あらしきこゆるん
源乃はるのねふ初しきり

ねむこころ神をくの神をりりて

あめの宿神

きりり人しきりりかきりり世とそりりりり

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと
あ女とまふあふりりりりりりりり

きりりりりりりりりりりりりりりりり

あめのりりりりりりりりりりりりりりりり

源乃はるのねふ初しきりりりりりりりりりりりり

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あ女二宮ハ族性て下才てこれいふとねれ用きあらんと

あふふ海とるもの候あり

院乃みし二月れうら小御寺にのりいりひね

院乃米菴に御寺ハ物語りハあふとるもの候あり

秘 月之中ハ二月中 仁和寺ふりり候て并

い院よりいれが御寺にせうとてことと 院乃海にあり

いふさうとてやがとるもの候て并

これあの中しとていり候て毫も角もさへしと

かふれくわふとて 女とれいふ海あり

あふとるもの御寺にせうとてことと 院乃海にあり

かふれあふの 院乃御寺の御寺に并

あふの御寺にせうとていり候て毫も角もさへしと

秘 女とれいふとていり候て毫も角もさへしと

秘 女とれいふとていり候て毫も角もさへしと

秘 女とれいふとていり候て毫も角もさへしと

秘 女とれいふとていり候て毫も角もさへしと

秘 女とれいふとていり候て毫も角もさへしと

先帝

源氏宮

病雲女院

式部宮

冷泉院所母屋

朱菴院之女所 女とれいふとていり候て毫も角もさへしと

秘

あふふ海とるもの候あり

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

秘 世のうみりふとていり候て毫も角もさへしと

勝月軒

朱蘆江卿母弘徽夫人李氏

臘月朔商約在此江右段工爲旧宅

惡者乃父此殿一條

娘文に
て成りて
いけ事と
あん
女に
あつて
い

は内務省の事と米産の定ううた

阿ふあんと
 勝乃事
 朱彦孔
 早あといん
 勝乃事

六条に
て

源氏なり

その世に
あはれ

こゝろせれさうみへ
海も脆く木に卯安と懐くを今も

いふ事あり世にあり
秘
次子にありあり

じうろくふくろく
ふくろくふくろく

此處有打之具之也此物也ひきりひきり

其の中納むる

人々せうとありつゝれきたのうゝ

中納之君乃兄和泉前司なり

人々をそのうちに
乞ふり深の和泉市目下流りぬ

其よりつゝ御心を
臆乃二系れり此所を

に集むる候より時をさへりてふかたぬ木をぞり

あられぬや
秘御山新乃半

孝に人なるとき
 源の和泉あり人母あり

うにれをひきとひくきふといふ

公れとんそ
川崎あね名そと人より
ひろ子

内省不疾
ニテス

何
なり
若
そ
と
く
ひ
そ
ま
あ
ふ
ふ
の
と
や
う
う
ら
ん

秘
弘徽殿のそと乃
て世にうたへ

卷之四

米薩北山寺

何
ひりきめらわさるゝ

とあゆまうところ

和泉寺あり

何 和泉守より

和泉守に名をうけしあり

ふ 和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありし
し人の性なりと云ふ事なり昔も臆乃ふと云ふ人ありし
と云ふことありしと云ふ事なりしと云ふことありしと云ふ
て和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

女 女

女と云ふことありしと云ふ事なり

和泉守

二条院乃事なりと云ふ事なり

心 心

和泉守に名をうけしあり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

女 女

女と云ふことありしと云ふ事なり

それ目いふなりと云ふ事なり

女と云ふことありしと云ふ事なり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

女と云ふことありしと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

女と云ふことありしと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

女と云ふことありしと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

女と云ふことありしと云ふ事なり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

女と云ふことありしと云ふ事なり

和泉守のあまふと云ふことありしと云ふことありしと云ふ
いふことありしと云ふ事なり

和泉守より志のこれと云ふなりとのあまふはふとて物とて之
常陰乃事と云ふことありと云ふ事なり

女と云ふことありしと云ふ事なり

うれし

源のくも騰乃らうとふくさふくさふくさ

私をうけかへおれ朝よのあけよりなりし世うきふくさ

わんうれあひありうり

勝れ源よまきふは二条院をたふさ

卿さうしれあひありうり

源子とわさくあけく人

ささめわさめあてあうさうさうさうさう

いとわうれあ

源の朝

うき時乃風流あ

きやうさうしれあ

玉藻よりあそふとれあ

まの比乃玉藻よあそふあけのいとおれあ

うつりめせうあ

二条相公乃常親乃時とあひあ

平仲うさうあ

同云仲ノ字獨て後一 一動念

平仲定之女小とにんさうさうさうさうさうさう

おと月とわさうてなうさうさうさうさうさう

井さうなれあ

五葉摘花卷

まのさうしれあ

まうにうりてあ

源の口とてあ

しれあ

られとてあ

源子とわあ

とれあ

源氏

う月と中にあうさうあうさうさうさうさう

ひ源子とねあうさうさうさうさうさう

源氏

源のせあ

りあ

あ

あ

う

う

あ

う

源乃うさうと評と

あ

年乃うさうと評と

あ

あさやきのきりぎりす
たがひたりきりぎりす

時をいふと云ふ

友れろ

むろゝんのきき事なり

いぢよいふそあふんあひ

秘
麗月夜のうらり

月夜

うづめをうづめ

朝日一
源を
むら
れし
あひ
さう
なり

中納言君れみ

朧月夜のうらみとあはれとあはれと

御ふつふあつたりあそびたをあれあそびあり

花
朧月粧れ女御あはにぬめりてふゆふの
職をそとありて

所宮乃
不辰乃事

及后乃事

よき世のさうりうくしふに名う
ふに源あうて

次月れつ乃半ありて乃一朧の趣あるをひく

中納言左衛門尉

ありはせしむ

中納言君は源氏麿のふゆとおふゆ

屋うさわらゆに

秘
新目とつり花

三河うもききぬ物とりはるはちとあけぬみ宿れあを

[illegible]

不_レ也_レ市_レ記_レ爲_レ之_レ例_レあ_レれ_レ又_レと_レ人_レも_レあ_レる_レ事_レ

黃定齋刻

忘るべき所なりとて
可成り之を忘るる

并
次月廿四日

秘
芳林のてふ志はこれなりと
源平此の事

心づかうをせよ

中納言

死を以てありて

秘臈乃心子源之付

もとあけんちんを肉とれ例あてきうらうはは

深の月とあそびとありとありとまゐりてと倒る

彼乃心とていふに事なれは

わろふとふとふとふと

海のふちより来る

秘
ふたつと色きうひりゆうさふ事となり

三

何人常たありぬらん其ありや

よめくにとらゑ移るす

七

秘 脆乃ほけうううを罵れんかんとあふや後院をいふより
そのううも人よりううわ

源の脆月夜と別してかと思はれひく人々

いうう思ひひり 秘 源のうう勝るううりけつめう

女君さうりあうん びふふふううううう

再 思乃脆く源の思ひありあううううう

えううううううう 思のうう新ううと源の思うう

ありしううう 思のううううううううう

うううううううに物をわづき 不及引弁

まううううう びふふふうううう

ううううう 秘 びふふ

ずうううううううううううううう

あうううううううううううううう

秘 不及引弁ありあうううううううう

ふふううううううううううううう

とそあうううううううううう

たりうううううううう びふふうううううううう

あうううううう 思のううう

うううううう 秘 源のうう

うううううう びふふふふふふふふふ

う 脆れ事とさうううううううう

まれ御ううう 女

作まううう 女とあうううううううう

源のううううううううううううう

ううううううう 女とあううううううう

うううううううううううううう

うううううううううううううう

きうううううう 再 明ふ中まれ事 十二カ

秘 思乃脆と十とカううううううう

お地へれううううううううう

うううううう 秘 御懐妊 再

ううううう 御ううううううううう

情交れかりしはかたれを人へけりてよ い 初対のふゆし

秘 女と交れしうへに初対れあり

あつれぬ 秘 実母れつゝあり

あひのう 秘 父となり

情交りしはかたれを人へけりてよ 并 父乃後

秘 女と交れしうへに初対れあり

うら恵 秘 母氏なり

まうりも何れ思の 秘 父とれりてあつれと女と

より 秘 父とれりてあつれと女と

あひり 秘 母女と人へあり

あけり 秘 母女と人へあり

ゆり 秘 女とれりて母のまゝ

を 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

人 秘 女とれりて母のまゝ

親不式、嫁娶之礼
以義親、況親之

秘
死心者其吟悲有死理

源
公
亮
為
少
輔
院
中
納
言

桐壺女御 明石中宮

宮女御あはれくろくろきちるゝにもあはれ入

なりそめきいそりよれんあそんこ

是より此れより極と

人

文
名
滿
下

つとてうんたあとう

身にらる秋やきんう海に雲のふもろのふり

系身此心秋よりいづるより
五葉のふ名ありておのゝさうり

夏後儒を以て交ふとつて是れも其類なりと云々

名はうもろりや
私市朝ふめつゝあつたおれ

ききりれいふともきこひのちとみり

吾輩は吾等校よりなり。うれいめ、友よ、心氣を起せ。

深の御ちのしるき雲のうらもくふゆあけ

水鳥の青羽を多くうめと萩乃をこゝそふあゝとふとふと

白鹿へりありき高れを榮めし乃又修くこれ

香葉山童蒙抄と云物に入若校必名不_レ清補抄に陰奥必成

又尾張と礼より
但是ハ交りく
成りて
集れり

夏清橋寺に毛弓あり
古帖に新毛を此に

保の奇に又久字あり一ろ一五山を又うろめたれとて

水鳥の青羽うろたへて死にゆくに海のかたを渡りゆくて萩の

下葉を以て上心よりうりたりあり

水高ハ池ヲ_レニ_モ入_ル由_ク家_ノ又_モ此_ノ中_ニ入_ル也_ハ斗_ハ然_レ

ふとれ方とて言羽とあり係れらうねとふとれ

此とナクともあり

とにあり
空にあり

あふれうあふう

海のく

こゝろを

秘
是も女と御ひりあれど

これのいふり

秘 朧月夜

いふる海にあり
秘 けあひい人かへししりあはし

まふれしりい

秘

まふれしりい
秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

秘 けあひい人かへししりあはし

祚月ふぬい乃う乃御堂ううれ御堂うて

秘
源の立ち上るに似たり

吳松風堂ニあり
源氏乃立ちふたり

延喜十三年十月十四日是日於西方賜尚侍友原朝臣四十賀
李郢王記云延喜四十九年八月京極御息取奉仕法皇六十之賀
何延喜五年二月廿五日

屋し松をうしめてまつり松

何
延長五年二月廿五日

彈正尹親王為民部卿六十賀於桃園宮設法會奉造藥師佛像奉寫藥師金剛壽命盤若心經
延長七年九月十七日

大旨諸息四人共於法性寺設五十賀齋會其後本堂毗盧殿

那像前安置銀藥師如來像
天曆三年三月十五日出無衛

督師氏卿為大相公 貞信公 七十賀於法性寺尊勝堂修法會七

佛藥師像寫金字壽命經七十卷
已上李祁王託也

ちとれろの
性實に

さいせう王座らんろうやあひるや

河
最勝王經十卷 題云金光明最勝王經
金剛般若經十卷 題云金剛般若

若波羅密經
壽命經一卷
題云佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經

いづれに
寛く
ゆかに
ゆかに

御堂乃後
暖帳乃御堂也

くろくろひつちり
ねんとりやうてふれ

人々もよくしとありきなり

此補經之南水原の所移れ為ふと云ふ

子、日、く、北、三、日、御、賀、所、之、日、欽

正月廿三日より御祭礼事ありと

秘
とと年歳に玉うも正月廿三日に加ふより海の内身に

よりて子細ある月なり
——自然誕生月なりなり

一説云此年此方とぞんた也

本院より此札を
 六条院に御祈願
 願はるる事

所製ハハ水ニシテ以テ下ル事有クナク

同云夢人之院乃以賀小侯侯所之取臺之七葉師仁信書之也

ひはちまうとてんまうとてんまうとてんまうとてんまうと

あり次二条院よりそれより宮せふ御二条院よりそ内御事など
ふせ御賀賀と二条院よりそよりいふよりや 一御合志
けいひよりそれより房れ事よりそより二条院よりそ
つひよりそいふよりそいふ二条院よりそより二条院より
せよりそ二条院よりそより二条院よりそより二条院より
御よりそよりそより

あいふよりそれよりいふ
わん
六条院よりそより

寝殿れよりいふよりいふよりいふよりいふよりいふより

義平七年十二月十一日陽成院御賀寝殿西放才三間立
螺鈿之倚子 今案紫上御二条院よりそよりいふよりいふより

私云陽成院者二条院也仍如此被注之歟
同云倚子と云ふよりいふよりいふよりいふよりいふより 一効

花よりいふよりいふよりいふよりいふよりいふよりいふより
御よりいふよりいふよりいふよりいふよりいふよりいふより
なりよりいふよりいふよりいふよりいふよりいふよりいふより

義平七年十二月十七日陽成院諸親王源氏為太政大臣御
賀西才一間立御衣机八前以泥繪置御服蓑八合各有黒紫
綾霞 清凉記院御賀夏延喜十六年儲平度御座机五脚
納隻冬御衣五脚積羅帛各五十疋 義平四三月廿六日於
常寧殿有中宮御賀帳臺東邊立三尺御厨子六基
衣蓑十二合一基夏
御衣五具冬之資具

うられんき
あひひともと云ふよりいふより

うられんき
あひひともと云ふよりいふより

あひひともと云ふよりいふより

あひひともと云ふよりいふより

あひひともと云ふよりいふより

あひひともと云ふよりいふより

うし乃御屏凡てうの式初はま
秘ふれ父ま
とい乃ゆなれ終なれと
何古今に因りて右大將左京定

四郎太中賀三つり時うなれ終うう
秘の屏風よりうう
せんといめん
秘座の煙より一平張りうう
并座乃きんあり
何平張り

うう乃右右よまへれうう
うれううひりうう
何平張り

御記云延喜十六年三月五日試樂吾即床子時一尅也樂行
更恭該信忠朝臣卒樂人奏署座
何万歳樂拍子二十新樂中曲長秋宮横笛譜云本是舞七恰而

今世舞五舞出入用調子清煬帝作
花延喜六年十一月十日御賀先奏万歳樂次獲合香次皇慶
こまれらんえううてううらん乃まひゆう

何南宮譜云昔善舞此曲者伴田磨右末小曲
山より池乃ゆこるうう

まれ神祇歌乃素気れ極うう但二条はれ流と乃つみれ

あそとうのうそふ露れ毛衣
何席田

ひ乃田れくいのうさあやまひ露のく
一段

まひ露のくあそとうのうさあやまひ露のく
二段

御ううもハ
秘桐壺乃帝れ御代とひひ出あふなり
采葉たこりくこれ名物あふまふうう

入入通宮
秘座乃こ
何廿七うそこれあふ

代あも所まれ
秘座乃こ
何廿七うそこれあふ

これ乃御うう
秘座乃こ
何廿七うそこれあふ

世中れううひあふん
何吾君不遊有深意一人
出多不容易六宮從今百司脩八十一車千万騎朝有宴飲暮

有賜中人之度數百家未兄亮君一日費 白氏文集 驪宮高

いふひやうな事 けきれ事と源の禪退ふのや

ふつれりちるあふり中まふてふや 中まの扶好

源の御賀と けふなり

御記云延喜十六年十二月十一日中幣の親王奉為御花賀
奉寫壽命經此日於仁和寺設法會 秘云あつゝ尚侍

上あま之御賀正月と十月と何と女らくも源氏につけ
て何とる日と秘載しつゝいふくも何とる日と

是と十二月末らるゝと方々あふりといふや
いふれあり 尚年中れありと行ふ

あつれ京の七寺と御と源の爲れ布四々めんびらるゝ
いふこれ四十ちりといふや百正

李郭王記云延喜四年十二月十九日内裏奉修六条院六十
御賀誦經王城七寺合布六千端進京七寺絹六百正則於
朱雀獄賑給物欲依例奉仕御賀然自彼院有御息停止如故
是而已 御記延長四年十二月十九日宣此日奉為太上皇

息災増宝壽於京邊七ヶ寺南良京七寺 陳太寺 興福元興大安
藥師 西大法隆

御誦經夏其布施用絹六百匹布六千端 貞觀十年遣使
於邊京四十ヶ寺平安城四十ヶ寺修轉經功德錢寺別有數

賀皇太后世尊也

延喜二年天子四十算布四十端十三大寺誦誦ヲ修せえ

承平四年三月中宮御賀七寺東西延曆極樂寺亦有誦經
其布施東大興福大安藥師延曆寺各五百端西大法隆東西

極樂寺各四百端奉為中宮息災延命也

いふ御と御息と 秘中ま乃御とれうら

いふまの御息と 井源氏中御賀といふや

秘二親乃御賀といふ念あふ源の御賀といふと
いふ秋好れ親も源とていふといふといふと親の志と

いふといふといふと 秘云秘つていふと

秘いふといふと

いふといふといふと 秘あふといふと若畧といふと

いふといふといふと 秘いふといふと

四十寺未三例アリ
再同云とキ如く四
十寺ハ寺ノミナ
定トニヤ
勅云大畧殘ル寺
有ハラス宣リ
タレナシ

此十札賀といふことなすべくと実物にも所りぬよういふ
 多ありとめんきなりとを

仁明天皇四十御賀冊一崩天曆四十二崩東三条院卅崩右
大將定國延喜六年行田十賀同年七月薨是木之復死

昭宣公ハ貞觀十七年四月廿一日薨ス貞信公ハ
延壽十九年四月廿一日薨ス例モあれと

多分うにきてありとくありとけきけいへととて

仁明天曆十一年
賀茂後崩御
の心をうけ

しうくれうととを臺とてひかりの光よりついでにそのめんどうで
又流るゝ例もあつたといふ先多分よつたり定まり妙なるなり

暖るゑん

五十元

何處へ行くをわいふ

公事なれど

中宮御方より内裏よりこれとありてありあれはくそり
あれより内裏より中宮御方よりまた町八軒あり

文、快理せし所、六条所へ作りと見られぬ所あり
 六条所より一、所なり

五

前乃正加矣

うんあら光るくちく大雲小をとりく

あ まゝいふ人忠縁うり交ふ中交れあふハハ氏と
六条院北江賀と中文れせう路りつて大谷とハ中文れ答へ

多々入らば正月一日中東二宮乃大祭なり

大后御記
義平四年十二月九日所寫
 是にあらんあらけよハ女れうそ

い亭桐ろくさろく父老ゆせなり

正月二日二宮大饗宴
西宮記云大納言白大褂二領中

納云同色一領衆議經大褂一領四位柳色合小褂一領五位
細長一連_三延喜中宮式云親王以下大納言以上各白大

褂二領中納言三位參議白褂衣一領非參議三位并四位參議褂衣一領五位綿一連高唱曰五位各賜之

今案此取資ハ中々とせり。にうりてあやうきにあそ

て親王以下は祿太倉の例と用らる。但し又ハ必らずしも

大嘗に^てく^にる^所く^ふく^し者大將乃水方^{玉子}
此以賀公等上^れ

御覽に書録のさへハ多記し同之河海ノ大巻とハ中ノ文此巻

5

ねさうそくを

衣つゝも御帶

石帶

河
高名錄云
韓將

落花形

岳無

鵝

雲形

鶴通天

死鳥通

死前坊志

秘

中文之父

多々此中の一乃物と

秘
私云くれとく竹とり

そり地うりにえりえうあうとて

秘
苧子也

再
回
所
と
い
て
る
を

一力記

大概二つあり七六寺に十寺あり御涌原爲功池後と投入
せられ又延長四年六条院の西雲小を朱雀北獄とて賑ひ事
とて是れ事と云ひく物なりふりふり河海に載れり
史記孟子にふりふりあり

仍孝經曰君之政設利以致之又云愛利俱行教乃悅史記云

堯乃賜舜綿衣與琴瑟，爲籩倉廩，予牛羊。

五帝本紀

以下畧之

内之御所

三ノ下ノ新幸モあり

事と此心乃外よりなり

中
飛
去
少
そ
つ
け
る
也

用急しめんとしあ

ふりふりふりふりふりふり

東
源氏禱
如
ふ
よ
そ
夕
常
に
祈
け
る
に
祈
ふ
か
く
た
る
を
富

其乃者大將やまのてふゆゑと

秘系子方

大納言安倍安仁

天安九十七倍癩病在大悅府三區十三號

大納言荻原道明

延壽十九年二月病上表一月乃薨

六中納之

大坂へ行く方々を大坂と大坂と

陸色より

源

いらやめ

寂強く物乃そふらふ心はけうし

久寂子也

私卿如我之懷人兮

内裏より此紙を乞ふ所にて、先づ將よりせ給ふと

うゝうゝ
れ町に所
あるひ
まゝ
ある

秘 花より里に御しこなり 再月

は御賀多々書れ者大おむらりる里に位りつうしとれ町れ
そんあうととりおこありしありし

くふなりけりここと
秘 内よりいれさされ賀あふふより
あくれさやうし
は 内書よりいれあり

御賀多々書れ者大おむらりる里に位りつうしとれ町れ
そんあうととりおこありしありし

は 新式云花人以奉仰先書出可造仕御調度木用物君内
寮穀倉院 天皇奉賀上皇御算議也中宮此議を後うり

秘 中宮之御決不審於前之秋好之御賀とつて
左書れがし
再しれしつて

は 正負太政大臣左右大臣各一人 大納言二人 中納言三
人 冬藏八人 合十六人 見寛平遺誠

是より人々内書多々書れ御りいしとれ
は 是より人々内書多々書れ御りいしとれ

そのあにゆりうれく羅あふふよりしとれ
ふよりしとれ事をもろりて御りしとれ

は 羅あふふよりしとれ
秘 花よりしとれあり

は 御りしとれ
致仕太政大臣御座調度れりしとれ

は 内よりしとれ
まつらありしとれ

は 前よりしとれ
致仕大臣ありしとれ

は 御座りしとれ
源氏名ありしとれ

は 今よりしとれ
致仕大臣ありしとれ

は 御りしとれ
主上宸筆に御りしとれ

は 宸筆に御りしとれ
秘 宸筆に御りしとれ

納屏風と唐篋とをとりあはれ戒之うと云へうと云ふれ

新優式云母屋四間副小障子立淳和御子跡屏風之帖御帳

東立同屏風一幅
御賀之
皇御算下
延長七年三月廿八日太極

御礼云々此御覽と實に乃中將此よりまゐり
實に屏風

二よりい御てとうりせくもせぬ

拾遺集ニ右大將宣旨云此賀より内より麻風病して始ふと

くわやうくわん
屏風文のてなり

春秋をにたり強きよりけ御屏風乃とまつみれうやく

わしはふたつあつて、うさぎとあひめりる。

和云錦の屏風、白く、善秋、忠信、中、あふ、ひ、屏風、う、ま、ふ

新中堂の書

20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541

何
清涼殿置物御厨子置櫃

考通託
小才一階
無置物才一階
右笙箱檢子
左比巴
才三階
筆
才四

階和琴 打物とるよ五へ 一先羯鼓 太常鼓 次太鼓 次鉦

敲 拈 拈 拈 拈

沸る雲十延る雲れじつるさ六情府れ宿るさうりつるさよ
 ひふとみろつるさ日くれそそわ

苑
延長二年正月廿五日
白宇多院被奉
若菜於内裏院引出物

御旨四十正
入夜日華門
次召馬寮給之
立左仗西次西面作之
今案上

延書之御空之御馬曰拾延八院より集りてせらゆめより院を

御意なりとて内裏より金坊より金と申らんを

馬寮此友人と居て是と稱ふは物猶乃御るハ内裏より列せり

あふりておるつゝとふれ友人をとれと川延花

十六年三月廿五日寅時

時りあさひよりそうつる事なり

延元十六年三月七日御

賀曰託云左右少將
諸衛左馬助木引御馬十疋奉覽

延長二年正月十五日同御託云方大座起座院御馬被奉入

仰令早度大臣稱唯下殿仰之即分御馬三十疋入自日華門

時周一尅

毎
 回云卿とて月い六条路へ内より始つりあふ義し
 今之末府と

家業承賀王恩令子

延喜六年

同十六年御賀供々賀王恩万案樂有由御託

河
加
之
悲

大食曲拍子十六可彈及合拍子八十
新宋南唐譜云古宋中曲舞出入用拍子

2. 足あり

此命辭とも記さるる
分れともうくる
多記樂なる

うきくは二川とつりつるも御覧よたよりなる舞ひ也

御抱といふ御うき舞衣久しう名ふり

^秘 びかに来あまうとるうくしと縁をとりとわけとちぢ

賀王^{イミナ}と王の^{ミナ}と賀と云^{イミナ}成し^{ミナ}と云^{イミナ}なり

新に記さるるもの

秘
舞と畧して
市井に於て

比巴ハミイ乃吾船のミ

鼻
骨
之
人

不
之
不
之
人
乃
御
之

源氏物語

何れん

敬仕上高和琴のしるしを各坊よりあつめしめ

うゑ御あしひり
うゑにひきと

源氏と致仕とはふたれわあつたふたれをあつ

[illegible]

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

て御へ海へあひくるまゝに

13
これら各座子に

梁書云西陽王大鈞字仁傳

年七歲高祖重之賜王羲之書一卷

延喜十六年所製之時

門御引出物。嵯峨之御子。隨一罽琴和琴各一面。一牧。又

延長御賀横笛琴箏和琴次才取一物各有其代
篋着松枝后

御引出物也

見後記

太后日記

嘉平四十三月九日

と、何て経ねんからり地所第一の道なり兼て

御子此系彙集と一川より又またとと一ひと

秘
う
れ
う
れ
ん
あ
あ
う
う

延長二年十二月廿一日中宮奉仕内裏御賀李郢王託宴醕

左大后率一兩大夫自中宮御方執樂筵於又廟堂御座碗大

后牙一執北
邊大后清和御時書
元清和七合角
和御時姜琬之
南
第春豐
馬
陳
什木才

次八条中納言執琵琶次琴箏和琴式部卿新王同之大后夢

曰后宮奉負大臣譜以次稱名
兼平四年三月九日奉仕中

宮御賀 貞信公記

不及祿退出追給祿并手跡和琴木卅万葉集

入筭二合

今案延長二年九月加賀乃川本物ハ申交より内裏

集せし所、文周と季了日記よりうけとり、今これより
 致仕後、政大后より、赤松より、これ川出物、延長、これ例より、
 ころころ、一、永平、これ中文の御覧、貞信公、この後、政大
 后、大后、是と、就と、家、後、政大、人、これと、終り、これより、
 通と、中、より、これと、川、出物、これと、永集、これと、終り、
 これと、例、これと、御、目、終り、これと、終り、これと、終り、
 これと、終り、これと、終り、これと、終り、これと、終り、

御るも
ひと
そ
右ふれ
つる
さ
も
に
ぬれ
樂
し
て
ぬ
と
あ

延長二年正月五日御賀御記所
入自日華月華兩門東西相立
承明門前時西三刻也
通奏庫曲唐高麗各二曲夕旁右大將
分八右馬寮此御邊

同御ると云ふところと縁とあつても心は百千萬ありてと云ふ
樂みの中へ一動も入るといふよりむしろいふところと云ふ事

あふ忠友んれくろ
あつりゆろあし

内書一院
昇一院ハ米積

一院（米蔵）
 上事も源と云ふれり
 中事あり

子乃也
秋好中寢

大将乃みむり
源の男子は
妻より死に
るなり

くわうふく
傍若無人

かれゝわゝゝいせれあゝんあゝあ
秋乃夕芳より幸ひ

五十九

葵上と云ふは具あつたれども未だ八咫鏡冒さず

義師云皮車あゝそひれむゝゝ夢よに橙葉あゝひあゝり

し今夕芳八母人し中々八所より如く栄枯ふりし

その目れ御さうぞくともあてふさぐれう

秘
花
ら
る
里
なり
并
日

之糸はわろし

秘
要は局なり

れあふそくふれいん乃と
秘苑らる里夕旁と子

れと云ふよりて今日ぬる乃粒入如とひ我里は

秘源字一

源氏平一茶

御書
り
に
と

御産り記

秘あり
れ
あり

秘の明の

らゐるに本丁あり

玉
あしを
ら

[illegible]

秘
緊
心
を
し
て
う
ろ
け
て
い
ま
ふ
と

あまのう

何
痛くあり

年考ふにとうや現ふとうを
教ノ字を何えりや

とくくよん老乃んれあくとへ再乃

ありて急ぐ御あり

秘
さ
や
い
あ
い
あ
あ

后此乃紀之者神宗乙卯年

ふけふけ

あはれものうらや

ふんとうわうふとあり

あはれ上水村

わとをとうあり

木

子
乃
此
非
王
乃
王
乃

明心見性

うけとれきなり

秘
ふろ
記と御方此位に

まゐりてやんきてゑぢり

とつみえんくくおろりと

文
齒乃と記くられむるにあり

頃又潛りて眉れり乃めつと云をひと

いふもそのわれありと多にふ
むそありわ

[illegible]

和
ふふふふふふふふふふ

私に次ノ子ニ交ヒて建シと云ふれども其ハ五所

五ノ波ノミナリニシテ

秘 うけふみんもさくさくといふにさうなり

日 奇なり心ありなり
しーれせりともやうなり人たつてゆまれ

と明名物
皓々国老兄と選アリ
あやうくあまをばれあうて尋ひてさうやうの

世とてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

これとてさういふ事ありて入るの位なりとやう
秘 入るれりて明るる事なりとありふる事なりと

宣旨教なりて今も女房れ名りまき(是の内侍を)と云ふ

延長四年六月一日皇后産男児登上内侍奉仕御湯大君前湯
却御湯殿日時已後七ケ日毎日在之續書記傳明往鳴弦以
下在之少將併尹之乳母大和奉仕御湯殿依此女能和此道
也故平中納言室管根朝臣女奉仕御對湯合ノユ

私云ひく人傳ハあはれしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
何のあひくともさしあひひく人傳を何れよなり

あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あはれ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

同云病入より一助年れ宣旨と云ふ病入(仰せ)
御座候事と云ふ事ありて

御事と云ふ事ありて
御事と云ふ事ありて

源の性候と云ふ事ありて
源の性候と云ふ事ありて

源氏院号れ後あれと云ふ事ありて
源氏院号れ後あれと云ふ事ありて

大將乃あまの御子と云ふ事ありて
大將乃あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

あまの御子と云ふ事ありて
あまの御子と云ふ事ありて

御前よりまゐりて、みまのまゐりて、いふに、これいふに、
ら也、やうとあり、せあり、いふに、や、御子孫、うへうへ、
と、その御身、折、改、まゐり、と、いふに、

不

過現因果經曰至晋光佛

乃然灯之
異名也

出興于世尔時善惠仙人因

与五百外道論議破其異見時五百人求為才子各以銀錢一
枚上之善惠門佛出興今灯照王迎請供養擊鼓唱令國內各
持花七莖畏王制令藏著瓶中善惠至誠感花踊上追叫就置
此女答言當送内宮欲以上佛不可得也善惠告言五百銀錢
雇五莖花瞿夷問云欲花何用善惠答言欲以獻佛瞿夷又問
獻佛何為善惠答言為欲成就一切種智慶脫衆生瞿夷答言
今此男子乃尔志誠不惜錢宝即語之日我今當以此花相与
願我生々常為君妻善惠答云我修梵行求無為通不得相許
生死之縁瞿夷即言我不徒我願花不可得善惠又云汝若交
定不与我花當徒汝願我好布施不逆人意惠若使有求從我
求乞頭目髓腦及与及妻子汝莫生疑壞吾施心瞿夷答言敬

從來命今我女弱不能得前併寄二花以獻於佛使我生々不
去此願好醲不离必置心中令佛知之時灯照王願諸官庶持
妙香花種々供具出城迎佛王臣礼敬散獻名花々悉隨地善
惠見諸々人衆供養畢已諦觀如来相好之容欲滿種智度衆
生故即散五花皆住空中他成花臺後散二莖亦上於空尔時
王民龍天八部見此奇特歎未曾有於是普光如来語曰善哉
汝以是行過僧祇劫當得成佛号曰釈迦牟尼既扶記已佛經
行処而地渴善惠即脫所著鹿之皮衣以用布地解髮覆已佛
踐而度履記之曰汝後得佛當於五濁惡世度諸天人不以為
難必如我也是時善投佛出家白言世尊我昨得此五種奇夢
一者夢卧大海二者夢枕須弥三者夢諸衆生入我身内四者
夢手執月唯願世尊為我解脱普光答云夢卧海者汝在生死
大海之中夢枕須弥者出於生死夢諸衆生入身内者為彼作
歸依處夢執日者智光普照夢執月者清凉度生今當執惱此
夢因縁是汝得未成佛之相善惠因已不勝踊躍大藏經
辯字函
今案内典外典二及とけり事ありとて、これ物なり

仁王御成

河
辯
（
中
心
を
め
る

施介如

入乃乃々浦乃堂ノ奇々也

五ノ

處分

色鹿より海へ里へ

舟
空
虎
一
弓
七
也

河海三川不用舟車而通

以常在灵鹫山之心中佛々々々滅度して常住不滅也

与れ毎々と薪匠の家とへ佛涅槃を奉ず

佛此夜滅度如薪盡火滅之說也 佛涅槃之時三明六通大
羅漢奉身豎通肘血現湧泣盈目生大苦惱ト大慙ニ成リ
佛ハ常在吳越山ナリト云フニモ才子モハアコトヤリシニハ
公レケルモコトヤリトナリ 昇

御之八菊此如之

明の上にもれおとつあうれ中交の

かゝる家とあり

子

秘
何
此
也

にうらなふてい

あけぬきあけぬきあけぬき

明急上戸と云ふ
 之より上りぬ
 事ありてな
 めるゝ小町に

多れとあれをうりてゆめひくきひくきとぬきぬきと

何れを以て其の爲に
 其の爲に其の爲に

后
之
一
人

何れも其の事をしてあらわ

此類とつて事ありに於て其の荒あきとありとを

知所守者乃心也

卷之六

唐公の事なりたつ字を多しと云

ひまわりと月をゆたあも

如左後之字のつゝは左所よりなりてゐる

所
と
型
心
て
ふ
う
と
う
に
ろ
う
何
に
う
何

とく月家とあつちろくは愛と親となりたるふ

まゝめまうきものなり

私入を思ふ事と聲にうさ事似合ふ事と仕あて御陶系
れめふあていふ事とさあていふ事とさあていふ事と
とさあていふ事とさあていふ事とさあていふ事と
とさあていふ事とさあていふ事とさあていふ事と
とさあていふ事とさあていふ事とさあていふ事と

各留半坐岳花葉待我岡浮同行入

秘源の事

そむさめ世まきうり 秘とありて田舎は後世

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

とれをよき事とていふ事と世まきうり

御乳又

イナ 乳をうとくけりや

私乳つゝハ乳書し乳文と成りては

ひうりれとていせき芳なり 乳文と成りては

うらりてんさてまつりあつて

惟思とぬ人なりつゝハお身世をさむきつゝも

ふれとくたも ありれ人なりとのうあ

ふいなりれん 井 ばふれ事とつて

あつてこりあつてまつりて 井 ばふれ事とつて

秘 明ふとれお身なりつゝハまつりて ばふれ事とつて

御乳とてひきこるうせん 惟思とぬ人なりつゝハお身世をさむきつゝも

れお身なりつゝハお身世をさむきつゝも

いやうりしと ばふれ事とつて

あつてこりあつてまつりて 明ふとれお身なりつゝハまつりて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

いふなりきこるう ばふれ事とつて

うけくくわいさうさうありけふとれあひつうてこそ
秘 雲とさうありけふとれあひつうてこそ

うさそあひつうてこそ
秘 あつれとの神

人か福んーりかふとあひつうてこそ

女さあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

さうさあつ海んふふふ 秘 あつれとの神

御祈りしれを教

くうめをひく

おとあひれまを路

羅尼乃教とてれとてく新橋の意趣とてれとてめ

まうーれ教
いまこころさね教し

きふあふれなりとて

秘源

いふあふれなりとて

乞うり入られれをとて

と源の意ふ親あり

うられとーはれとてけつとてまうーん

明ふ入られ事とてれとてあふれとてんいふれとて義れ

飛と滅とてつとてけつに飛のさうん事とてれとて

明ふ入られとてはれとてけつにけつに飛のさうん事とてれとて

さうーれとてれ人
き傍言傍とてめとてえんゆりしゆは

と若利ふれとてはれとてまふれとてあふれとてれ人ありと

はとてふあふれとて

せられとてうらわれとてあふれとてあふれとて

わーとてあふれとてこれとてあふれとて

今とてれとてあ

多れきとてあ
あ源山新川方河同 秘川方河

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

ううとてそのゆいづん
秘源の初

秘傳と申されさるる一きくも人あはれや

秘傳秘傳人お訓し

今いつかあつて申事と

その由まゝ入るより申す

秘傳と申され申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

秘傳と申され申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

秘傳と申され申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

秘傳と申され申す人といふに

あつて申す人といふに

秘傳と申され申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

あつて申す人といふに

并大いこれ世の人これ中れずとより何とあゝわといふ言ふを
 実なる人心中にありある時とて此に在りて
 あゝうわなとこれいふつゝうゝわなうりてある事あり
 たりく飛きたる時ハ　ふ海なる海ありあゝの飛きたる時
 并海も人も飛きたるあゝうわなうゝわなとあり
 たりなりといひとよりといふ

うゝもろろ海ににろろ

秘
水々々々々々々々々々

ありあけ

秘
源の足及びふ人にとれり

二

久しに会ふて久しに事

少くとも性より一はりらむと物とふあまをなつてひし
 は股常不表れ品定めれんよかつりひ物治れん意とらり
 とくくつとあふ金と中とらりけ勝れ物に取ひ中性
 中へんあそくしあくれ目持あそひ股ひ表乃品定めを海より
 とあくくしり

秘
それにて人夢心ありて

ゆゑに

[illegible]

ひふのふん

秘
字

久あゆりひうけ

混ヒタリ
乾
酒テ巻モ有

字とり部字部居うれんれり勢

とくはひなりぬ

昇
空
外
の
美
之
海
如
く
あ
る

夢の如く人をとりあるて明るの心を

五十二

わづれとてわづれ

ひうて

秘
あふひひあふ

五
一
五
一

女御乃取之

室々として

秘
ろ
れ
上
の
刻

るれをわくせうの御返書なり

あふ海に物ふあ

井
ひさしちふの志とをなすめ

秘
悪業より清く
と抱め
ゆるい
前より
に
そ
う
な
る

事にあらば
記とあり

二七五

うしろさやうに

ねあふねあふねあふ

もろの世あはる

秘
家此何事
乃見之
始

秘
明
之
少
者
所
以
不

有子一死(女御と註)西(乃)終(乃)所(乃)

うしろひき

[illegible]

ふあうりよそ明をさひるるわらあさひゆるるやと
それにもさうりしてきくらんよあゝあゝ

五
乞ハテ此ノ如キモノヲ

私花子文

あゝお早下して実母に会ふ
給へる所うへに

物は心でつく

是乃事也

人々立ち上りて建心乃死んて所さるるなり

ルカとアタ

乃々然に云ふ

秘
史
金
瓶
梅

空しく思ふもあらずはるかに海のかきぞ

うわくをきくうちに

わづれあは

中々

海のうねり空のまじり

さるに人となれ

あゝれとら

くーる

男

文乃御之

夢の如くありて

女之源のなりきりまねる

かゝるものなるを

秘
び
す
も
武
部
の
美
の
津
女
を

早下ろつてさうねと今一匹は女と云ふ友あり

いづひとて

解
女

ふらふら

源氏物語

後言

月々々々々々

文
阿しぬの事し

秘
明上意心中宿世とありあり

西人といふに

女之為物也

まてぬまへ

わづれふのあやとをうて

Handwritten signature or scribble.

秘入乃此隱居と云

多比乃そのまゝのまゝと

或勸文那^ニ輸多^ニ那^ニ福^ニ比^ニの^ニ字^ニに^ニ程^ニす^ニ此^ニ之^ニ所^ニに^ニ必^ニと^ニる^ニ者^ニ此^ニ部^ニに

奧入雄有以況以奇
沈挺不知誰況頗允
俗夏凡

親
厄ふれあひじとせんかゝる名上れ事といふ

秘
那
駱
多
死
——
以
奇
之
奧
入
破
之
評
勢
物
際
臣
底
說
後
為

凡俗なりたるよりて不用と云ふれどもてあんとりて終極思
事しは類しむ福かれ程とてふゆゑなりき

後れせとていなりつ 入道といふは進れ強と云ふ

大將乃君とてい極思 必 夕暮女これまのふと云なり

こゝにいふるなりぬき 女これ御事

朱雀院なり人乃いせなり

いゝゝゝあやうに 女これ御事夕暮れ

ふ思ふに記さ ありひふれ祈しゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ 必 女これ人

物さひなりけり御事なりといひあゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秘
要
方
名
と
め
て
ふ
し
と
な
か

心可死

女はさうして、さういふ人となつて居る。

源の別として御志と云ふは

秘
人々るるにふつとゆるるを

朱乃乃君也

つなぐ

秘
朱荏

如之

女と柳本にわづらん半とるる

女とれあちえあふふふふ

うけあふもろ子あふて

秘
栢
木
如
家
之
心

心もろもろに死ぬ

幸くいふにふしそわさるる者

秘
女之宮をくはふをさへあふれもやなり

小竹姫と
うねらね

女に交れ沛りのと子極まれ効のしめあり

いふよりうとあつて極上といふこと

あゝ
わ
ん
と
う
り
わ
い
ろ
そ

死
海の御山ありんす

秘
源氏物語に志を述べてその時々と相合てありありと

源氏物語よとてしるす人又志す所をいふ

私事花後交わりて花を秘同くは後者も皆れ実をこれ
事とてふいふ次第

ちりくちりくをぬすん 秘源の初こる事 かくてあさ月

お月やまうとて 何ゆきとてふれ時を

こゆいささ 井中さうれをうり

一勅薩小うりり 秘むらり里れ御

うしうしれ 秘むらり里れ御

御りりて 秘むらり里れ御

所作或云起戦國時託黃帝踏鞠之勢也以練武士知有才也

今軍士無夏得使踏鞠有廿五篇 元興寺 本名法興寺小大なり

概乃ふり 天智天皇大倉鎌足入床

なり 延喜五年三月廿一日御記

曰晚从綾綺殿前令侍臣蹴鞠覧之同五月八日仁壽殿蹴鞠

五月廿二日殿前三日御常亭殿有蹴鞠

ころり 秘鞠といり

まり 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

えん 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

あ 秘鞠といり

并に思ふところを述べる

秘
并友侯式宿子れ
己
之
う
れ
格

なるといありてふるうせうかをうく

人あらずんば

勝府司あるは自然と懐く

科
研
も
ま
り
や
そ
う
れ
あ
い

くさくさ

保の初上たては
是後ハ蹴鞠
蹴鞠

ふふし成通ひり卒未滿もうて融く乳痛ひ卒せれ

上巻より一版此事

うぶをいふうくなりや

死
絶
し
鞠
の
事
し

さうして、
 現存の
 中から
 一冊を
 選んで
 読む

ふんちとてやあをひくとつりうに合ふこと

一劫死を^レ化^スと^ス翻^ル乃^レ狂^ルの記^スに^レう^レつ^テあ^リふ^ル處^ニを^レ分^ス事^ナ

五ノ屋多々乃ハ
五ノ屋多々乃ハ

やうふのふふてし

ろろろろろろ

蔞芳

いまは緑々々々々々々々々々

未の磐れうそ免う

う
ふ
鞠
之
と
ふ
め

2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526

134

とろれまにあま

秘
寝所ル由じとに階ル所多し

こゝれけみうそ

初
來に
し
て

に
と
て
交
は
さ
れ
う
ら
ん
み
あ
る

秘
本
勸
と
ふ
ふ

見ゆらふ事に入らるる事七う

ととれうらん
へふふふふふ
ととれうらん
へふふふふふ

くわんせといふところ

朝候日高冠額綬

新
そくめりより何れと云ふなり

さうしてそのうちに

秘各直衣

再
表
白
裏
蘊
芳

うねるはそとにあらそふも

必
多
中
少
人
事
中
指
費
此
所
事
亦
其
妙
之
道
也

親高、揚貴、凡そこれ事、あこれ、流う、れろと、えと、先ハ、鞠と、ろの

[illegible]

とりあへざるの指費とてあつて浮文の指費とて云々

[illegible]

秘
藏
よ
あ
ら
り
て
あ
ら
れ
る
也
一

元
資雅の急なり枝とらへてきりぎりしうられを
たの枝と何となくわたりや

資雅の一字多源氏傳と本郷と云蹴鞠乃家と云雅の乃
子と云雅の後多羽虎の御時ノ鞠乃家と云鞠ノ譜亦成
道以後より 以下花鳥同ノ畧と

とろけ中乃志あやた

河
中
臨

東坡居士句

乙丑說二系廟階奉令座作此中乃一子隨書在側定其座級
先例未就

先例未効

三六九

落苑狼籍風狂凌

麻
ミタリカワシ

秘
吹風毛ふーわうへは垂ハさううとく宛てらるゝとけん
月奇上及うん 雲虫川方あ

あふれハ

狗牙し御前のうさ女とれうさし

師

秘
女之文

五十九年七月

以手而執禮又手象之字體

わさ代衣ハとれた代衣し 後撰ニ といふといふの所々ある
多しよりとらにわさ代衣をしつゝとて平あり

拾遺玄秘すまひなりうろくふかむとぬえとひさし袋より出でて
うろくとして能定奇あり奥に載く

妻れを母とせしむる二月乃末なりハ妻れを母とせしむる
 ねえといふ様れを向よとせしむる妻のくれめと様れは向よとせしむる
 ねえといふ様れを向よとせしむる妻のくれめと様れは向よとせしむる
 ねえといふ様れを向よとせしむる妻のくれめと様れは向よとせしむる

様より御令はぬさとつづねおる御礼より
 こと祝ひるやこけ食之月かれは美れあしけし
 ぬ末なれは美れききく妙き向と云こ
 ぬさぬれつづねおるやこけ食之月

御木下とも忘りけり

極祚正一現事之末下也

うらとえれとあしは物落りうきり

人字ろく

秘之此之也

福をめぐらう

野王祭云猫似豚而小能捕

鼠為糧

音苗和名称古万

にんとうろふ

川崎ふなり

秘にふりらぬまり陽うそ月かぬ

桂餅にふりた葉と入る餅に桂の葉と合てりらぬ粉

あまのうけてはくうわと鞠乃あて食ひくうや

おつた大石の御さうりひりこんふにふぬか

とまりおつりそあおのうりあかりし徳河もたぬを

そわれとりふ

そわれ

秘者なれ

大將をふりふ

とろくろあつたきれんやあり

いそやここれ

宰ね乃君

くけり乃に

女ととりえんあつたきれんやあり

とまりひに

秘木はひくをなふ事

まりあんきと

のい

まそく

とらあ

う

は

家

い

秘原

ふ

う

と

一

大將乃

夕

ねこれに

秘

うしろなれ初

院うしろなれびるいよ

秘

柏初

源乃うしろなれうしろなれうしろなれうしろなれうしろなれ

おろまひつみ

秘

女うしろなれ

并

うしろなれうしろなれ

秘

若

あひしあひし

秘

夕暮れ初

遅

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

それうしろなれうしろなれ

まじうしろなれ

まじうしろなれ

うしろなれうしろなれ

秘

うしろなれ初

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

秘

秘

うしろなれうしろなれ

秘

うしろなれ初

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

秘

うしろなれうしろなれ

秘

うしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

うしろなれうしろなれうしろなれ

あやうきふち 秘川弁見ても何れ

ゆえに母あはれもせぬ人のあつてあやうきあやうき
私に物言ひをいふも何れもあつたあやうきあやうき
あやうきあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき
秋にあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

海にふちあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

ふちあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

伯侯一日乃心もあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

ふちあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

私にふちあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

いふあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

女とあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

ふちあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

秘事あやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

御うきあやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

例あやうき

秘事あやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

昇苑奥に注ぎあふ

自れ即ちれあふるあらし

おうつれうかあせぬ

ひしあし苑奥にありあけ毎分なりくしやう

東乃くあし出でし

或ハ東乃れ毎分とて

朱雀院乃始宮立原院よりわたりぬり

こゝあらしに御帳しそそれれきといふことありて

女房れつりあり

女と乃えらるる後あふありし海と

るしありし



